

「助け合いの架け橋」

宝塚市立光ガ丘中学校 3年 大杉 陸

私の父は建設業の現場監督である。橋を架けたり、道路を作ったりといった、国から請けた大規模なプロジェクトにも携わっている。ある時、父の仕事について聞いてみたことがある。

まず、初めに知ったことはそれらの仕事が税金によって行われていたということだ。例えば、二〇一五年に起きた関東・東北豪雨による鬼怒川の氾濫。堤防の一部は決壊し、川の水が街に流れ出した。テレビでも、連日放送されていたそうだ。その災害復興にあたり鬼怒川の堤防の強化工事に父は約一年間従事した。父によると、この工事の発注者は国土交通省、つまり国である。したがって、父が携わっていた鬼怒川の堤防復興工事は、税金によって行われていたのだ。あれから九年、鬼怒川の堤防は決壊することもなく市民の安全を守り続けている。

父は「常に丈夫で安全なインフラ設備を作る」ということを信条として、働いていると語った。そんな、地域に暮らす多くの人々のために汗を流す父を、私は誇りに思う。このような尊い仕事をして人々の安全を守れるのも、国と税金のおかげである。税金というひとりひとりが納めたお金が、巡り巡って人々の生活を守っている。税金のおかげで、被災地から遠く離れた人でも、被災者を支援することができるのだ。私も、被災地を映したニュース映像を見て、何もできない自分にもどかしさを感じたことがあった。しかし、そんな自分も大人になれば、納税という行為を通して被災者を支援できる。そのことを父の話から気づき、嬉しく思った。また、このような大規模なプロジェクトでは、作業員だけでなく、建設資材を取り扱う人、建設機械を製造する人といった非常に多くの人々が携わる。そのため、雇用にも良い影響を及ぼしていると思う。

私たちが住む宝塚市でも、一九九五年一月一七日に阪神・淡路大震災という災害に見舞われた。多数の人命が失われるとともに、設備や建物等に大きな被害をもたらした。それらの復興にも、税金が使われていた。私たちが住む宝塚市も鬼怒川と同じように、災害の復興に税金が使われていたのである。自分が住むこの大切な街を守るためにも、私たちがいずれ納める税金が不可欠なのだ。

税金と聞くと、マイナスなイメージを持つ人が多いだろう。しかし、税金というシステムのおかげで、遠くの被災者を助けたり、自分たちの住む街や暮らしを守ったりすることができる。税金とは助け合いの精神の象徴、つまりは人と人とを繋ぐ架け橋なのだと、今回改めて思った。その精神を後世へと繋げるために、税金の意義について、将来を背負う私たちが考えなければならない。